

世界遺産となった国立西洋美術館

国立西洋美術館は、7カ国17資産で構成される複数国に及ぶ指定の一部として、2016年に世界遺産に登録されました。「ル・コルビュジエの建築作品－近代建築運動への顕著な貢献－」という名称でなされたこの登録は、フランス人建築家ル・コルビュジエ（本名：シャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ＝グリ、1887年－1965年）が設計した建築物に光を当てるものです。モダニズム建築の旗手、ル・コルビュジエは、当時の社会問題にこたえる革新的なさまざまなコンセプトや技法を編み出しました。外観よりも機能性を大切にする、統一された「人体の寸法に沿った」建築物という主張をし、美を重視する古典的な手法から離れて「合理的」なミニマルデザインを好み、また、建築と都市計画を一体化させて、インド北部のチャンディイーガルなど都市全体を設計しました。

ル・コルビュジエは革新的なアイデアのいくつかを、1959年に開館した国立西洋美術館に注ぎ込みました。その建築学的特徴と外観は当時とほとんど変わらないまま保たれていたため、ル・コルビュジエの名を冠した資産の一部として、同美術館の建物の世界遺産への推薦をフランス政府に促すことになりました。初めてユネスコに提案されたのは2008年で、その8年後に承認されました。建物は、実際的である範囲で、ル・コルビュジエの設計と当初の設計図に従って現在も維持されています。ル・コルビュジエは設計図を完成させる作業を、日本人の弟子である前川國男（1905年－1986年）、坂倉準三（1901年－1969年）、吉阪隆正（1917年－1980年）に委ねました。3人とも、その後にキャリアを築き上げるのに成功しました。前川については、1979年に同美術館の新館を設計し、また上野恩賜公園内の他の2つの主要建築物である、東京文化会館（1961）と東京都美術館（1975年）も設計しています。